

TOKYO PAPER

ト キ ョ ー ペ ー パ ー

for Culture

フォー カルチャー

“東京の文化を研究する”をモットーに昨年創刊した『TOKYO PAPER for Culture』。みなさんにとって東京とはどんな街ですか？この街と自分、どんな関係を築けていますか？どんなところが好きですか？嫌いですか？その答えひとつひとつが、日々、私たちの研究材料になっています。第四号も、東京文化発信プロジェクト（ブンブロ）を拠点にしながら、様々な街を歩き、人に会って語らい、そこで得た実感を紙面で発表しています。何かひとつでも、“東京とわたし”の関係を深めるきっかけが転がっていますように！

Founded last year, the “TOKYO PAPER for Culture” is a forum for investigating the culture of Tokyo. What kind of city is Tokyo for you? What relationships do you build with the city? What do you like about it? Dislike? Your answers are the fuel for our daily research. In this fourth issue, we present our impressions from meeting and talking with people while walking around different neighborhoods for Tokyo Culture Creation Project events. We hope you find a thing or two scattered here that triggers a deepening of your relationship with Tokyo!

第四号／004

東京のあかつき

この街の、自分の居場所

六本木、暗闇と路地裏に見る夢

田名網敬一（アーティスト）× 幅 允孝（ブックディレクター）× 坂本美雨（ミュージシャン）

研究テーマ④：

アートを通じて、子供たちの感性をひらく



六本木、 暗闇と路地裏に見る夢

大都市・東京を象徴する街のひとつ、六本木。

ブンプロのひとつ「六本木アートナイト」の開催地でもあるこの街から、東京文化を見つめたい。

そんな想いに応えてくれた今回の“客員研究員”は、六本木と縁の深い田名網敬一さん（アーティスト）、幅 允孝さん（ブックディレクター）、坂本美雨さん（ミュージシャン）です！

Roppongi is one of those places that seems to symbolize metropolitan Tokyo.

For this issue we decided to take a look at Tokyo culture by zeroing in on the neighborhood,

site of Roppongi Art Night, with the help of three “guest researchers”

who know the area well: artist Keiichi Tanaami,

book director Yoshitaka Haba and musician Miu Sakamoto.

Keiichi Tanaami

Miu Sakamoto

Yoshitaka Haba



はじまりは、六本木上空から。快晴の東京全景を眺めた後は、六本木交差点界隈をぶらり散策。実はこの街で青春時代を過ごしていた田名網さん。初勤務地が青山ブックセンター六本木店、自身の現在の活動原点がここにある幅さん。そして公私ともに訪れる機会が多い坂本さん。そんな背景を持つお三方は、それぞれこの街への想いを胸にしながら、座談会へ。話題はまず“闇”のことからはじまりました。

田名網敬一（以下、田名網）：京都の大学（京都造形芸術大学）で教鞭を取るようになって、京都に通い出してから、自ずと東京と京都を対比して見るようになっていました。そこで色々違いはあるけれど、一番感じたことは、闇なんです。

幅 允孝（以下、幅）：東京は明るいですから、その分、京都で闇を感じられたのでしょうか。

田名網：僕が青春時代に六本木でよく遊んでいた頃は、街全体が闇に包まれていたんですよ。今では想像できないけれど、自宅から盛り場に行くまでの道のりがずっと暗いから、盛り場の灯りが見えてくると、ほっとするくらい。当時は『ニコラス』という日本で初めてピザを紹介したお店があって、

そこにしょっちゅう通っていて。フランク・シナトラや石原裕次郎が来るような店なんだけど、周辺は平屋の民家が並んでいるだけで真っ暗闇だから、『ニコラス』だけが不夜城のように明るかった。六本木と言えばその印象が強く残っています。ところが今の東京は、マンションの1階に飲み屋さんがあったりもする。だから東京の街全体が、そういう闇の通路が少なくなっている。また僕は人間の想像力や思考力というのは、闇が一番掻き立ててくれると思っているから、昔に比べて今の人は、想像力も鈍くなってきているんじゃないかな。

幅：闇のお話でいうと、社会全体がいろんな意味で明るい暗い、その両極になっていて、それぞれに対してあまり奥行きや幅を感じることができなくなってきている気がします。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の中で、漆器の闇についての話が出てくるんです。漆の暗い底の方に、器の色に溶け込んだ液体が澱んでいるのを眺めたときの気持ちが書かれていて。要は暗いからこそ、見えてくるものがあるということですね。

坂本美雨（以下、坂本）：ふたりのお話を伺っていて、ちょっと逸れてしまうかもしれませんが、私は六本木のTSUTAYA（TSUTAYA TOKYO ROPPONGI）側から、麻布十番までの街並みがすごく好きなんです。麻布十番商店街には、古いお店も立ち並んでいて、昔から住んでいる方も多いですね。そしてその商店街を抜けると、すぐ近くに六本木ヒルズがあるじゃないですか。商店街から見る風景の中に六本木ヒルズが存在が、今はもう溶け込んでいる。その、古い街並からあまり境目なくぬると、都会に足を踏み入れられる感覚が、東京らしいなあと。麻布十番商店街の近くに父方のお墓があるので、よくお墓参りに来ているんですけど、そこは都会の喧騒から離れていて、都会のデッドスポットみたいな感じ。とても静かで夕暮れがきれいなんですよ。

田名網：あの辺りはまだ路地もあって情緒的ですね。

幅：不思議なもので、暗闇坂（港区元麻布）の方へ向かうと、とても静かですよ。

Tanaami: I started teaching in Kyoto (the Kyoto University of Art and Design) and commuting there regularly, I began looking at Tokyo and Kyoto in comparison to each another. There are many differences, but the one that really stands out is the darkness.

Haba: Did Kyoto seem dark because of how brightly lit Tokyo is?

Tanaami: Back in my younger days when I spent a lot of time going out in Roppongi, the whole area was enveloped in darkness. The roads leading from home were all dark, so it was always a relief to see the lights of the entertainment area. In Tokyo today, though, you find bars on the first floor of condos, and dark alleyways are harder and harder to come by. I don't think anything stimulates human thinking and imagination as much as the dark; maybe that's why people nowadays aren't as perceptive as in the past.

Haba: Jun'ichiro Tanizaki's book *Inei raisan* [In Praise of Shadows] includes a discussion of black lacquer in which he talks about his feelings when looking into the dark depths of a cloudy soup at the bottom of a lacquer bowl. The idea is that there are some things that can only be seen in darkness.

Sakamoto: I like the area between the Tsutaya side of Roppongi and Azabujuban. The Azabujuban shopping district has lots of old shops and many of the residents have been in the area a long time. And when you've passed through the shopping district heading toward Tsutaya you're practically at Roppongi Hills, right? Today, Roppongi Hills blends in as just another part of the view seen from the shopping district. The way you can slip from an old townscape into the modern city without a sense of boundary crossing seems very Tokyo-like to me. I often visit my paternal family's gravesite located near the Azabujuban shopping district. It feels completely cut off from the bustle of the city, a kind of dead space where one can enjoy the quiet beauty of a sunset.

Tanaami: That's a really atmospheric area where you can still find little alleys and side streets.

Haba: Strangely enough, things get very quiet in



Roppongi, Dreaming in the back alleys and darkness



坂本：「静か」は、音のお話にも繋がりますけど、東京は無意識に耳に入ってくる音がすごく多いですね。そしてその音に対して、私たちの身体は鈍感になっている。逆に言うとなすべての音が入ってきてしまったら、心がパンクしてしまいそう。だからある種、体が進化しているというか、入らないように鈍感になっているとも言えるかもしれません。

幅：「関係ない」と、通り抜ける技術みたいなものが、いつの間にか勝手に身に付いてしまったのかもしれないですね。

坂本：私自身、音楽を作るときにいつも想うのは、本当に肌触りの良い音を、身体が吸い込んで気持ち良い音を作りたいということなんです。同時にそれは自分の音楽に限らず、純粹に気持ち良い音を体感できる場所が、東京にもっと増えて欲しいと思います。特に子供たちが、「本当に良い声。良い音。それってどんな音だろう？」ということが体感できる場所が必要じゃなくなってる。それはコンサートホールでも良いんですけど、やっぱり日常的には行きづらい場所ではあると思うので、そういう音を試せる、聴くことができる広場があれば面白いですね。

文化に対して容赦なき場所

幅：京都には色んな要素をそぎ落として、余白を作って、余韻を感じさせる“文化”があるとしたら、恐らく東京、それも特に六本木はどんどん重ねていく“スーパーノイズの文化”な部分があると思うんです。でもそれはそれですごく面白いというか、可能性を感じる場所があります。

田名網：相対的なものだからね。京都に通い、京都の文化の厚みを知ったことで、逆に東京のことも好きになりましたよ。

幅：最近、年を取ったせいか、六本木交差点に立っていると、色んな客引きに合うんです。そういう状況になって考えてみると、六本木交差点は、要はアートやデザイン、音楽といった、そういう文化に対して最もアウェー感が強い場所なんですよ。でも本当は、その文化に対して容赦のない場所に対してこそ、通用するものでなければならない。それを自分の仕事に置き換えたとき、例えば『木村伊兵衛のバリ』という本を持って、洒落たお店に通うようなお客さんに見せたら、「木村伊兵衛、最高だよ」「これ再販したんだ」とか、そういう反応を示してくれるんです。一方でそういう文脈が全く通用しない、リハビリ専門の病院にいる患者さんに見せると、実際に仕事で見たことがあるんですが、患者さんは誰一人、木村伊兵衛を知りません。でもあるおばあちゃんは「ええ写真だね。もう一度足を治して、バリ行かなあかん」と、言ってくれました。そういうことが本来大切だと思っていて。つまり写真の力が本物であれば、誰が見てもグッとくる部分が必ずあるはずなんです。文化だなんだと言って、高い場所にとどまっていはいけなくて。客引きのお兄ちゃんがぐっとくる仕事をしていきたいと個人的には思っています。

坂本：どんな表現でもそうですね。すごくよくわかります。

幅：文化に対して容赦のない場所でもちゃんと通じる提案という意味では、あの六本木交差点で通じたら、きっと世界中のどこでも通じるような……、つまり一番文化を感じてもらうにあたっての圧倒的な容赦のなさが、六本木交差点に

はある。僕はそれが面白い気がしています。きっと客引きの方も「1時間の間に、何人呼び込まなきゃいけない」とか、自分のことに必死ですよ。そういう方たちが例えば1枚の絵を観る、本を読む、音楽を聴いて、「はっ」と、何かを感じ取ってくれたら、本当の意味で六本木を文化の街と呼んでいいのではないかと思います。道のりはある程度長いですが。

孤独は都会の贅沢品

田名網：さっき、「路地」という言葉を口にしたけれど、今、六本木に限らず、銀座やほかの街も、大きなビルがどんどん建つことで、路地がなくなってきているでしょう。本来路地の役割は、そこで小用を足したり、喧嘩した男女がこそこそ仲直りしたり、別れ話をしたりね、そういう路地ならではの人間の営みがあるわけでしょう。

——一同笑。

田名網：もう迷路みたいに細い路地があると、ドキドキしますよね。あの楽しさというのは、人間が根源的に持っている何かに訴えかけるものがある。でも今はいろんな街でメインストリートと、あとはちょっとした裏道があるだけに変化してしまった。つまり街に情緒がなくなってきている。日本には四季があるから、それによって日本人の独特の感性が生まれているわけですけど、これでもし四季がなかったら、日本人はもっとどうもう獺猛な民族になっていたはずですよ。僕はね、路地というものは、この四季と同じような役割を果たしていると思うんです。もしも区画整理された大きな道だけで街が成り立ってしまったら、人間の資質は相当変わってくるはず。殺人事件も増えているし、闘争的な人間が多くなる。

幅：そうですね。だから例えばスマホの地図アプリを使っても、決してたどり着けない場所みたいなものがあるってほしいですね。今はとにかく情報があふれすぎて、調べれば何でもわかっ



Azabu when you head toward Kurayami-zaka.

Sakamoto: Speaking of quiet, in Tokyo we're subjected to such an incredible number of sounds that we aren't even aware of hearing many of them. Put another way, if we were to process everything that we heard we'd probably go mad. In a sense, you might say we've evolved to become less sensitive, to shut things out.

Haba: I suppose somewhere along the way we mastered the art of tuning things out, of letting them pass as being of no concern.

Sakamoto: When I compose music I always make a conscious effort to create sounds that have a pleasant texture the body can absorb, that make the listener feel good. At the same time, I wish there were more places in Tokyo where it was possible to listen to genuinely pleasant sounds, even if it isn't my music. I especially think it's important that children have

places where they can experience and understand what makes a really good sounds or a really good voice. Concert halls are fine, but they aren't the sort of places you can visit every day. I wish there was a park or plaza where children could test out and listen to different sounds.

Haba: If the culture of Kyoto can be described as one of paring things down to the minimum, creating blank space and a sense of lingering reverberations, Tokyo—and especially Roppongi—is perhaps more a culture of multi-layered “super-noise.”

Tanaami: It's all relative, isn't it? Commuting to Kyoto and learning the depth of its culture has really rekindled my interest in Tokyo, too.

Haba: Perhaps it's a sign I'm getting old but lately when I stand at the Roppongi intersection I get approached by all sorts of touts. In situations like that I can't help but feel that the Roppongi intersection is

about as far away from the cultured worlds of art, design, and music as you could get. There ought to be something that is able to get across precisely because it is presented in such an unforgiving environment for culture. In the context of my own work, if I take a copy of *Kimura Ihei in Paris* and show it to the sort of people who frequent stylish shop, they say things like, “I love Ihei Kimura” or “So, they reprinted that.” On the other hand, if I show the same book to patients at a rehabilitation clinic who know nothing of the context—I've done this as part of my work—not a single one of them will have ever heard of Ihei Kimura. One older woman, though, did say, “Those sure are pretty pictures. Guess I'll have to go Paris once my leg's better.” This seemed terribly essential and important. If the photographs are really powerful, something is sure to register no matter who sees them.



お三方の胸元のロゼットは、客員研究員の証！それぞれの洋服にとっても映えています。

てしまうので、その分思考が停止してしまっている。僕は今の時代、「知る」ことと、「生きる」ことが断絶してきている気がするんです。要は自分の「記憶」もパソコンひとつあれば、それを「外部記憶」として委託できるから、昔のように“生き字引”と呼ばれるような人は、もう必要なくなったと思われちゃっている。けれど、結局のところこうして情報化が進んで、外部保存装置が増えていくことで、短いタームでのレスポンスを求められながら、代替可能な人間同士のコミュニケーションばかりが増えてしまったんじゃないかと。本当に人間が必要な情報って身体を用いて血肉化してゆくしかないはずなのに。それはあまりハッピーなことではない気がするんです。それに、どれだけSNSを利用して人と繋がっても、1日で会える人の数、直接語りかけられる言葉の数は限られている。例えば人が3m級の生き物になったりとかしたら別かもしれませんが、生物学的に、人間のサイズ感が決まったときから、ヒューマンスケールという程よい領分があるんじゃないかと。

坂本：その感覚よくわかります。ちょっと角度は違いますが、私も音楽を作るときに、自分の友達のために作っているようなところがあるんです。“ために”と言ってしまったら対象はすごく狭いですし、実際、小さい頃から“大衆性”というものに対しては、色々と感じていることもありますし、「ポップスをやるからには、それじゃいかん!」というのはありますが……。でも、それでも「歌いたい」という本当の動機は、今こうして皆さんとおしゃべりしていることと一緒に、もっと小さくて強いところにあるんです。そして私のこの気持ちは、きっと皆さんそれぞれに共通項として持っているに違いない。そう信じて作っているところがあって。

幅：1人に届かないものが1000人に届くわけがないというような話ですよ。でも本当に、親しい友達や家族、そういう代替不可能な人と自分の、本当に個人的な関係みたいなものから、もう一度、街が少しずつ塗り替えられていったらいいというイメージを僕は持っています。少なくともあのお店に行けば、あの人がいて、こういう言葉をかけてくれる。その感覚みたいなものを取り戻さないことには、街という装置の手の平の上でずっと踊らされてしまう。それでは自分の



根をちゃんと街に張れない気がします。色んな人と繋がりたいという不安はわかりますけど、結局人間は孤独なものです。

坂本：孤独でいること、孤独を感じることは、生きているってことですよ。孤独じゃないと絶対に見られないものがある。街でも青空でも、全く違って見えると思うので。

田名網：孤独をかみ締めるっていうのはいいじゃないですか。僕の作品もそうやって生まれますから。都市はどこも喧噪だからね、そういう時はひとり呑み屋のカウンターで熱燗呑むくらいがいい。孤独は贅沢ですよ。

幅：孤独は目の前の他者がいて、初めて生まれる感情ですよ。田舎のような大自然の中にいると、孤独とか感じないですから。都市市ならではの、最高の贅沢です!

研究結果のまとめ

日本の文化の特徴の一つに、詰め合わせの美学というものがあると思う。重箱やお弁当箱のような小宇宙が台所から生み出されるあれだ。そして、六本木には東京の魅力がお弁当箱のように詰め合わされていると考えてみたらどうだろうか。闇や路地裏の魔力も、六本木交差点の容赦なさも、人と人のつながりも、この街にはモザイクのように詰め合わされている。そんな風に見てみると、「六本木アートナイト」(P5)は様々なアートと街の食べ合わせを楽しみ深夜の重箱つつきというところか。朝焼けとともに味わう最後の一品はきっと一生ものの味わいになる。



幅 允孝 Yoshitaka Haba

1976年愛知生まれ。BACH代表。人と本がもうすこし上手く出会えるよう、様々な場所で本の提案をしている。著作に『幅書店の88冊』(マガジンハウス)、他にも『本の声を聴け ブックディレクター幅允孝の仕事』(著・高瀬毅／文藝春秋)が刊行中。

Born in Aichi in 1967. President of Bach, Ltd., Haba makes book proposals in a variety of forums to help people and books connect a little easier. Publications include *Haba shoten no 88-satsu* [88 Titles from the Haba Book Store]. Also available is *Hon no koe o kike: book director haba yoshitaka no shigoto* [Listen to the Book: The Work of Yoshitaka Haba] by Tsuyoshi Takase

坂本美雨 Miu Sakamoto

1980年東京生まれ。音楽活動と並行して、舞台出演、ナレーション、エッセイや映画評などの執筆活動、TOKYO FM系JFN38局「ディアフレンズ」(月～木／11:00-11:30)のパーソナリティを担当。現在、ニューアルバム『Waving Flags』が発売中。

Born in Tokyo in 1980. In addition to her musical activities, Sakamoto perform on stage, narrates, writes essays and movie reviews, and serves as a radio personality on Dear Friends, a program aired Mondays to Thursdays from 11:00 to 11:30 on Tokyo FM JFN 38. Her latest album is titled “Waving Flags”.

田名網敬一 Keiichi Tanaami

1936年東京生まれ。京都造形芸術大学教授。60年代からメディアやジャンルの境界を横断して精力的な創作活動を展開し、日本におけるサイケデリックアート、ポップアートの先駆けとして知られる。世界中のギャラリー、美術館、映画祭等で作品を発表。

Born in Tokyo in 1936. A professor at the Kyoto University of Art and Design, Tanaami has pursued cross-media, cross-genre creative activities since the 1960s and is known as a pioneer of psychedelic art and pop art in Japan. His work is presented at galleries, museums, and film festivals around the world.

Sakamoto: That’s true of any kind of creative expression, isn’t it?

Haba: A proposal that registers at Roppongi intersection can probably make it anywhere in the world. I mean, that has to be about the least forgiving place there is for feeling a sense of culture. and I think we’ll only be able to call Roppongi a cultured neighborhood in its true sense when having people like that look at a painting, or read a book, or listen to music causes them to catch their breath and really feel something.

Tanaami: I was talking about alleys before and with all the huge buildings now going up .I suppose such side streets are disappearing. The real role of back alleys, of course, is as a place for the sorts of human interaction that could happen nowhere else: a couple breaking up, or maybe patching things up after a fight. Mazes of narrow alleyways make the heart race. They appeal to something fundamental about the human condition. So many neighborhoods today, though, are made up of just a main street and a few side streets. There’s no atmosphere anymore. The character of the Japanese people was cultivated by the four seasons, and without them we would surely have grown more fierce. I think alleyways play the same role as the four seasons. If we rezone our neighborhoods so that they’re made up of big roads alone, I think it will change people’s temperament.

Haba: I agree. We need to have places that are all but impossible to find even when following the directions on a smartphone map. These days it seems there’s a real disconnect between knowing and living. You can rely on your computer to act as a kind of external memory that replaces your own, and we no longer need the kind of people once called “walking encyclopedias.” With the advance of computerization and the proliferation of external storage devices, everyone now expects an immediate response. I think there’s been an increase in interpersonal communication that’s utterly perfunctory and interchangeable instead of irreplaceable. It’s not a very happy situation. And no matter how many people you’re connected with through SNS, there’s still a limit to how many people you can meet or words you can exchange directly in the course of a day.

Sakamoto: Coming at the issue from a slightly different angle, when I compose music I try to imagine I’m doing it for friends. That may sound a bit narrow in scope, and ever since I was little I’ve thought quite a bit about popularity and know this might not seem the right approach for pop music, but I still feel the real motivation for wanting to sing, like talking with you here now, must be something both smaller and more powerful.

Haba: But I really think it would be great if we could renew the city little by little based on these unique relationships we have with irreplaceable people like close friends and family. At the very least, if we can’t recover the sense of going a given shop and knowing that such-and-such a person will talk to us in a certain way, then I think we’ll never escape the sense of dancing to the tune played by the urban machine, and that’s no way to put down roots in a place. I understand the insecurity of wanting to be connected to lots of people, but we’re all alone at the end.

Sakamoto: There are so many things you can only see when you’re alone, too. The city, and the open sky, looks completely different.

Tanaami: And why not enjoy the taste of being alone? That’s certainly where my work is born. Being alone is a real luxury.

Haba: It’s funny how the sense of being alone only seems to emerge in the presence of other people. Who feels lonely when out in the country, in the great outdoors? Solitude is an urban extravagance!